

漱石文学における「縹緲」

—『虞美人草』の「縹緲のあなた」について—

お茶の水女子大学大学院生

胡 穎 芝

本発表では、「縹緲」との言葉に着眼し、中国文学における「縹緲」の使い方を検討し、『虞美人草』だけではなく、夏目漱石のほかの小説や漢詩に見られる「縹緲」は、どのように使われるのか、漱石がこの言葉をどう扱うのか論じてみる。

「縹緲」はもともと「高く遠くかすかであるさま」を意味するが、『文選』『海賦』から「神仙説」に結びつかれ、唐代においてこれを意識して作品で使っている文人も少なくない。特に、白居易の「長恨歌」によって、日本の知識人もこの使い方を意識したのではなかろうかと考えられる。さらに、夏目漱石の小説や漢詩にも、この「神仙説」に結びついた「縹緲」の使い方を見つけられるので、彼もそれを意識しながら作品に使っていると思われる。

したがって、『虞美人草』を発表する一年前に世に出された『草枕』に描かれた仙境那古井を合わせて考えれば、『虞美人草』における甲野さんの憧れる世界は、明らかに東洋的な「縹緲」たる理想郷＝仙境であると考えられる。

ところが、漱石の描いた仙境と、中国の文人たちの描いた仙境は根本的に違うのである。漱石の描いた仙境はただ仙境に類似する場所だとされ、仙人や仙女は描かれず、小説にも言葉として直接には出てこないのである。つまり、その仙境の最大な特色は「中身がない」、「実体がない」のであると考えられる。実際、この無意味な空想世界も、明治の知識人が近代化に進む現実世界への不満や不安に対する解決策を見出せない矛盾を象徴していると思われる。